「匂兵部卿」巻考

――薫と匂宮の年齢――

嘉藤　久美子

（一）

『源氏物語』第三部所謂「続編」の論のために、先ず「匂兵部卿」巻を中心に薫と匂宮の年齢を問題にする。

筆者は風間書房刊の『源氏物語注釈』（梅野きみ子他著）に第七巻（「若葉」上下）から携わってきた。その時以来去来した疑念を纏められないまま徒に日々を重ねてきた。今一度私の中にある続編論を整理することは最終巻刊行以来の宿題であった。今回その片端を長い間お世話になった『東海学園言語・文学・文化』の最終号に掲載させて頂く幸運に恵まれてここにある。

『源氏物語注釈』八巻（「幻」迄）の発刊が二〇一〇年一二月で、その後続編の注釈に取りかかった。勉めて精密に読み進んで行くことを心懸けながらも未熟さ故に誤読誤解も多いことを恥じるが、以前から薫と匂宮の関係や年齢差に抱いていた不審が蟠っていった。しかし、共同作業の中では明確な主張に形を結ぶことなく、宿題を心の片隅に置いたまま今日に至った。その間に熊倉千之氏の『紫式部集のちから相撲ーメイキング・オブ・『源氏物語』』[注1]の刊行があり、さらに八巻刊行と同時期には、『『源氏物語』の歌589首の構造原理』[注2]を上梓され、『源氏物語』の読み方を根底から考え直さざるを得ない程の大きな衝撃を受けた。前著の「はじめに」には、「続編では三宮を二条院に住まわせた上に、紫上の遺言を実現しようとするどころか、ただの好色な男としてしか造形していません。その上、柏木と女三宮の不倫の子で、年下であるはずの「薫」が、二つ三つ年上の男として主人公のように行動し、結局「宇治（憂し）の物語」は、将来が見えない暗闇の中に終わるのです。」と、新たな見解を公にしている。その根拠は、二〇一五年に出版された同氏の『『源氏物語』深層の発掘ー秘められた詩歌の論理』（笠間書院）によって、続編の作者が「幻」までを書いた紫式部ではないことを明証したことにある。

続編の起筆を源氏の跡を継ぐ二人の貴公子を軸に始めようとした作者の意図は、当然ながら源氏薨去後も続く『源氏物語』中の人々の動向に見える人間の真実の追求であろう。源氏のあとを継ぐ主人公を創るとすれば、その薨後数年から始めるのは妥当だが、源氏第三世代の誰を据えるか、迷うところであったろう。三の宮は親王、薫は実は源氏の子ではない、源氏でもない。正編の終わり方に相次いで誕生した二人は、招来する未来の物語の担い手を予告するように登場した。殊に三の宮は紫の上に鍾愛され活き活きと利発で聡明さに輝いていて、遺言まで託されている。次世代の担い手として最も相応しい造形であったが、『源氏物語』の主人公として親王では如何かと思ったのであろうか。源氏のように臣下にするには、紫の上や父帝、母中宮を始め、

四周に鍾愛され過ぎていて、敢えて二番煎じの源氏のような後継争いを描く面白味はないと捉えたか。世の中を如何に生き抜かせるかには、却って身分の弊害が立ちはだかるであろう。故に、表向き源氏の子息として世に重用される人物設定を以て、続編は二品宮の若君に主軸を置いて語る方法を選んだのであろうか。光源氏はたった一人も連れ添う女を幸福にはできなかった。紫の上の悲痛な思いは、未来を担う若宮に源氏の轍を踏まないようにと願って慈しんだ三の宮にあった。続編を書き継いだ作者は、その君に託した紫の上の遺言の意味を理会できなかったのであろう。光源氏の持っていた「すき」と「まめ」を分有する（野村精一）[注3] 男二人を併せて……漸く源氏に近づける程度の程々の男を造り上げ、「まめ」な男こそは世の中にも人にも誠実に、仕合わせをもたらすと錯覚していたようだ。

（二）

冒頭に（第一段）①「光隠れ給ひにし後、かの御影にたち継ぎ給ふべき人、そこらの御末々にあり難かりけり」と、光源氏亡き後の、その子孫の状況を回想して続編の物語が始められている。「「光隠れ給ひにし」とする始発は、正編の最終部を承け、そして、正編の光源氏世界の始発を連想させる語り口である」[注4] が、「たち継ぎ給ふべき人」の列に、源氏の第二世代である冷泉院は「かたじけなし」として除外され、第三世代である紫の上に鍾愛された今上の三の宮と、女三の宮の若君[注5] が登場紹介されて始まる。薫は源氏の子という意味では第二世代に当たるが、内実は第二世代故権大納言の子であり、匂宮と同じ第三世代に入る。この二人は、③「とりぐ〳〵にきよらなる御名を取り給ひて」いるが、「いとまばゆき際にはおはせざるべし」。しかしながら④「いにしへの御響き、気配よりも、ややたちまさり給へるおぼえからなむ、かたへはこよなういつくしかりける」という。その上で、

⑤「紫の上の御心寄せことにはぐゝみきこえ給ひしゆゑ、三の宮は二条院におはします。⑥…帝、后、いみじうかなしうしたてまつり、かしづききこえさせ給ふ宮なれば、内裏住みをさせたてまつり給へど、なほ、心やすき古里に住みよくし給ふなりけり。⑦御元服し給ひては、兵部卿と聞こゆ。」と説明されている。

「御法」で幼かった匂宮は、紫の上から「大人になり給ひなば、こゝに住み給ひて、この対の前なる紅梅と桜とは、花の折々に心とゞめてもてあそび給へ。さるべからむ折は仏にも奉り給へ」（御法三）と遺言を託されていた。この「ここに住み給ひて」の「ここ」は二条院ではなく、六条院であることは熊倉氏が前述の『『源氏物語』深層の発掘……』で指摘し、私も見解を述べた。[注6]「御法」では紫の上が法華経千部供養を行った二日間しか彼女は二条院には滞在しなかった。それをこれまでの過去の読者たちは、法会の後二条院に残って病を養った、と誤読してきたのである。「御法」の語り手は、紫の上の心情と同化融合するように「まづ我独り行方知らずなりなむを思し続くる、いみじうあはれなり。」（二）とその時を、「まづ我独り」と、死に向かう思いに寄り添って語っていた。集った人々も「こと果てゝおのがじゝ帰り給ひなんとする」のは、彼女と同様に、である。「昨日例ならず起きゐ給へりし名残にや、いと苦しうて臥し給へり」と語っても、紫の上が二条院に居残るのを示してはいない。それぞれに万感の思いを胸に「おのがじゝ帰り給ひなんとする」のである。それを「遠き別れめきて惜し」み、最後の花散里との唱和で「みのり」を詠んだ。

ところが「匂兵部卿」では冒頭の「光隠れ給ひにし後」の「御末々にあり難」い「たち継ぎ給ふべき人」の中で、⑤「紫の上の御心寄せことにはぐゝみきこえ給ひしゆゑ、三の宮は二条院におはします。」と紹介されている。先に述べたように、三の宮は二日間しか二条院に滞在せず、紫の上が育てたのは六条院である。このことは続編の作者が正編作者紫式部ではなく、「御法」を誤解釈して書き継いだ別人物

であることを示している。これが原因で長い間「御法」「幻」は誤読され続けてきたと言える。従来から「幻」では、舞台が二条院か六条院かで解釈が分かれていて、「古今明解なし」（朝日古典全書『源氏物語』五 p.110頭注）と評される矛盾として指摘されてきた。

続編は別人作であることを前提にこの論を始める。

「三の宮は二条院におはします。……御元服し給ひては、兵部卿と聞こゆ。」とある、この元服が何時のことかは分からない。既に元服して、匂兵部卿宮と呼ばれている。

正編の終わり「御法」「幻」には二人の年齢表記はないが、誕生時（若菜下四二・柏木六）や匂宮の年齢が明示された（横笛六）時から数えて、「幻」では匂宮六歳、薫五歳である。源氏の読書始めが七歳であった頃の記述などを鑑みると、匂宮の利発さについては、「横笛」「御法」「幻」での言動から推定理会できる。「匂兵部卿」では、薫が「十四になりて、二月に侍従になり給ふ」以外に年齢を明かされる人物はいない。この巻からの物語の年立は、諸注この薫の年齢を基準に夕霧や匂宮の年齢を割り出していて、「幻」巻末から八年程経過しているとする。当然ながら現在の年立では、匂宮は十五歳とされている。

物語は、以後女一の宮、二の宮、春宮、大殿の御娘たち、さらには「さまざま集ひ給へりし御方々」のその後を述べて、この巻が正編を継ぐ続編であることを示す。また、「玉の台」であった二条院、六条院も時移り人代って、気付けば結局「たゞ一人の御末のためなりけり」と詠嘆して、「明石の御方は、あまたの宮たちの御後見をしつゝ、扱ひきこえ給へり」と、一人明石の君だけが特別の宿運だったことを特筆。残る夫人方へも大殿（夕霧）が源氏の遺志を損なうことなく、「あまねき親心に仕うまつり給ふ」と結んでいる。そこに「対の上のかやうにてとまり給へらましかば、いかばかり心を尽くして仕うまつり見えたてまつらまし、つひに、いさゝかも、とりわきて我が心寄せと見知り給ふべき節もなくて過ぎ給ひしことを、くちをしう飽かず悲しう思ひ出できこえ給ふ」と、夕霧が「野分」の垣間見以来憧憬し続けた紫の上への思いを忘れずいることを記して、「天の下の人、院を恋ひきこえぬなく、……かの紫の御ありさまを心にしめつゝ、…思ひ出できこえたまはぬ時の間なし」と、六条院に源氏のいない寂しさを「火を消ちたるやうに」なったと語っている。これらの言及は源氏に対する手厚い惜別の言葉で、これから語る続編が、その源氏の物語の「正編」を継いだ物語であることを指し示す。ここまでがこの巻の前半で、これから語る物語の中心人物への橋渡し的意味合いを以て総括したものである。

続く（四）①「二品の宮の若君は、院の聞こえつけ給へりしまゝに、冷泉院の帝とりわきて思しかしづき、…②御元服なども、院にてせさせ給ふ。③十四にて、二月に侍従になり給ふ。④秋、右近中将になりて、御賜ばりの加階などをさへ、…急ぎ加へて大人びさせ給ふ」は、源氏の末子としての薫に関する語りで、巻末最終行まで続く。なお「竹河」の「四位の侍従、その頃十四五ばかり」（竹河五）と符合。

「二品の宮」は、女三の宮のこと。朱雀院が帝に奏して位階されて、「二品になり給ひて御封などまさる。いよ〳〵はなやかに御勢ひ添ふ」（若菜下九）とあった。正編では語り手がこの重々しい呼称で女三の宮を表すことはなかった。その若君を「二品の宮の若君は」、と殊更の表現で語り出すのは、今までにない重々しい呼称により、新しい物語の主たる人物としての扱いを示したもので、同時に新たな物語の展開を予想させるものである。

薫は、源氏の遺言を守る冷泉院、秋好皇后に鍾愛され、元服も院で行った。曹司のしつらいまで院「みづから御覧じ入れて」かしづき、加階は言うに及ばず、処遇に至らぬところがない。それはこの巻で判明した故致仕大殿の女御腹の女一の宮を「限りなくかしづき給ふ御ありさまに劣らず」とあり、源氏の子であると思っている院が、血縁と思っている弟に対して特別の恩顧厚遇で処していることを暗示してい

る。その他にも、帝を始め四周の人々が温かく見守り、格別にもてなす様子が覗われる。「桐壺」で光君と呼ばれていた源氏を彷彿とさせるが、何よりこの君の場合、彼自身が抱える出生の「つつが（恙）」についての真否を、母にも他の誰彼にも質せぬ鬱屈した幽愁、内憂的な思索が強調されている。これは光源氏の背負っていた敵対する勢力による迫害といった目に見える暗い蔭とは異質のもので、自助努力では払拭し果せない、生来身に背負った無言の如何ともし難い憂愁である。登場早々に、「つつが」に言及され、物心ついた頃から「身を思ひ知る方ありて、……よろづのこともてしずめつゝ、おのづからおよすけたる心ざま」で過ごしてきた所以である。彼の「心ざま」の実相を知る人はいないが、「およすけたる心ざまを人にも知られ」ている。幼い子供のこうしたいびつな成長を促した要因は、血統に対する六条院内での徹底した沈黙が、決して寛容からではなく、異血筋の存在を断じて容認しない冷徹な排除によるものであろう。それ故に周囲から源氏の末子として厚遇されていることの薄氷を踏むような危うさ、怖さ、不安と後ろめたさは、成長と共に増し、これが一見思慮深く道心指向の篤い、老成した人柄を、また出家志向をも導き出している。

しかし、そうした反世俗的生き方は、宇治の橋姫の物語が進捗していく中で、大君に関わる当初こそ彼を大きく支えているが、必ずしも最後までその姿勢を保ち続けているようには見えない。それは多分当初は六条院の末子としての権威に裏打ちされ得ていった社会的地位が、成人してから後徐々に、幼い頃のように脆弱で他力的なものではなくなって行くことによるのであろう。やがて「夢浮橋」に至っては、表面的な反世俗性に基づく思慮深さを世渡りのよすが、手段と化しているようにさえ見える。

おぼつかな誰に問はましいかにして始めも果ても知らぬ我が身ぞ

「匂兵部卿」には詠歌はただこの一首のみで、全五十七首の薫の詠歌中の最初の、また続編の冒頭歌でもある。出生についての不安を（五）

②「いかなりけることにかは。何の契りにて、かうやすからぬ身にしもなり出でけん。善巧太子の我が身に問ひけん悟りをも得てしが」、と自問し、また「悟り」を切望しながら、内に燻り続ける不安と困惑をそのまま詠じたものだが、羅睺羅が釈迦の子であると証明されて仏の御弟子と悟ったようには、実父が誰であるかを教えてくれる人も、「問ふべき人も」なく、確かめる術も勇気もない。無限に輪廻し続ける我が身と吐露しても④「答ふべき人もな」い。彼の出発点である。

然して、最終巻「夢浮橋」も、ただ一首のみ

法の師と尋ぬる道をしるべにて思はぬ山に踏み惑ふかな

これが薫の最終詠歌でもあることを併せ見ると、この二首は続編の首尾を呼応させて、新たに語り始める続編の主題と、その結びを詠んだものと思われる。最終巻「夢浮橋」ではこのただ一首に集中するようにして全体が閉じられている。しかしまだ、薫は「思はぬ山に踏み惑ふかな」と自問している。これでは、遂に道は啓示されなかったか、見つけられなかったということになる。物語は薫の成人後の社会への旅立ちを「匂兵部卿」で示し、この人が主人公としてやがて大きく羽ばたき、遂には立派な人間に変身、成長する様を物語ることを期待させて、始まっているのであるが、この次第では薫は続編の主人公の資格がない。

入道している母女三の宮を⑥「はかもなくおほどき給へる女の御悟りの程」と捉えて、「蓮の露も明らかに、玉と磨き給はんことも難し、五つのなにがしもなほうしろめたきを」と推断して、「我、この御心地を、同じうは後の世をだにと思」い、助けたいと願う殊勝さである。しかし、③「善巧太子の我が身に問ひけん悟り」を得たいもの、と切望しても叶わず、「幼心地にほの聞」いた父親を確かめられないまま、⑦「かの過ぎ給ひけんもやすからぬ思ひに結ぼゝれてや」、とその人の極楽往生を危ぶみ、「世をかへても対面せまほしき心」で、ひたすら求道している。それ故、現世での「世の中にもてなされ」る「御身

の飾りも、心につかず」、当然「元服」も「もの憂がり」、「しづまり給」うのであった。そんな薫の心の内の葛藤を全く知らず、最高権力者である帝や明石中宮、夕霧も、源氏の遺言に違わず最大限の傅きで見守っているのだが、彼はそれに思い上がることもなく自重して過ごしている。

（六）⑥「この世の人とは作り出でざりける、仮に宿れるかとも見ゆること添ひ」、⑦「あなきよらと見ゆるところもなきが、たゞいとなまめかしう恥づかしげに、心の奥多かりげなる気配の、人に似ぬなりけり」、と捉えられる人柄で、源氏の美を承けただけではなく、身から漂う⑧「香の香ばしさぞ、この世の匂ひならず……百歩のほかも薫りぬべき心地しける」という。「善巧太子」を引き、釈迦の御子を連想させる叙述の後では、体内から放つ芳香は、諸注が指摘するように、仏の化身を思わせ、（八）⑧「さすがにいとなつかしう、見どころある人の御ありさま」であり、匂宮はこれを（七）①「いどましく思して」競うという。しかし、二人は常に④「思ひ交はし」、「例の世人は「匂ふ兵部卿、薫中将」と聞きにくゝ言ひ続けて、その頃よき娘おはするやうごとなき所々は、心ときめきに聞こえごちなどし給ふ」のであった。二人の性格や生き様は対照的で、片方は（八）⑤「心にまかせてはやりかなる好きごと、をさ〳〵好まず」、匂宮は（七）②「好たる方に引かれ給へり」である。（八）⑤「身を思ひ知る方ありて」①「世の中を深くあぢきなきもの」と捉える薫の、⑤「およすけたる心ざま」が強調される。⑦「人に愛でられんとなり給へるありさまなれば」、消極的な女性への対応であっても、女房たちには「はかなくなげの言葉を散らし」、「そこはかとなく情けなからぬ程」に扱うので、それを頼りに集まってくる者も多い。世間の抱く薫像と実像との乖離はある。これが主人公にならしめている要素か。勉めて振る舞う謹厳実直な人としては扱わない。

女性に触れた序でに、二人の若者に相応しい女性（夕霧の六の君）を登場させる。（九）夕霧は、花散里が六条院丑寅の町に住み夕霧や玉鬘を後見したように、同じ丑寅の町の一条の宮（落葉の宮）の許に、この姫君を（九）③「今めかしくをかしきやうにもの好みさせて」置く。この先二人の若者が夕霧の意図をどう汲んで関わっていくのかを問い掛けて、夕霧の政治家としての器量を、薫との関わりで物語って、この巻の終わりとする。舞台設定は、「初音」での新造六条院の華やかな光に満ちた新春を彷彿とさせるように、（十）①「賭弓の還饗の設け」である。⑨「こゝをおきて、いかならむ仏の国にかは、かやうの折節の心遣り所を求めむと見えたり」と催される盛大な宴に、夕霧大将にいざなわれて負け組の宰相中将薫も座に連なる。「人に愛でられ」重用される実例である。そこでは風俗歌の「求子」が舞われ、主夕霧に促されて「客人」ではなく「弟」薫が、それに応えて⑩「神のます」を謡う。

執拗に薫の秀逸性をかたり続けて、これからの物語に薫の活躍を予想させて言祝ぐものであろう。匂宮の影は薄い。

（三）

ところで元服に関しては、「人生十二を一周といふ。此歳冠礼する和漢例也。礼記曰天子之子十二而冠」（『河海抄』）ともあり、正編の冷泉帝十一歳、源氏・夕霧十二歳で元服した例は、それに符合するとされてきた。主人公と目される薫の十四歳元服は遅いが、既述のように、「元服はもの憂がり給ひけれど、すまひはてず」（五）漸く応じたとある。元服に相応しい成長を遂げている薫がいつまでも元服しなかった釈明をしたもの。つまり、十一歳元服の冷泉院は、「程より大きに大人しうきよらにて」（澪標三）と、その大人びた成長を特筆されている。朱雀院は源氏の元服時に、「一年の春宮の御元服」（桐壺二四）とあり、「ひととせ」は前年の意なら十四歳元服である。この「ひと

とせ」を先年（数年前）の意として十二歳の時とする説（『玉上評釈』）もあるが、「桐壺」では、源氏の元服が、「ひととせの東宮の御元服」に劣らず盛大に挙行されたことを強調した何気ない一言が、ライバルの東宮（朱雀）より源氏の卓抜した成長ぶりを強調する意味を担っていた。十二歳の源氏は元服に相応しく、十四歳朱雀院の場合と対比させていたのであろう。また、夕霧の場合は、父源氏は「御元服のことおぼしいそぐ」が、任官時「四位になしてん」とする上層貴族子弟の通例に反して、「まだいときびはなる程」なので、六位に叙したことを、「ただ今、かうあながちにしも、まだきにおいつかすまじう侍れど、思ふやう侍りて、大学の道にしばし習はさむの本意侍るにより、今二三年をいたづらの年に思ひなして、おのづから朝廷にもつかうまつりぬべき程にならば」（少女三）、との考えを示していた。父親は息子をまだ「きびは」とは認識していたが、実は十四歳の雲居雁と比べると、十二歳の夕霧は大人びているように語られていた。[注7] しかし、「今二三年をいたづらの年に思ひなして」学問を修めることが肝要である、との考えのもとで、その学習期間を一、二年と踏んでの十二歳元服と思われるので、源氏は、十四、五歳にならなければ官吏として一人前の働きはできない、と考えていたことになろうか。その意味では、薫の場合も十四歳元服は世の常からすれば問題のない年齢である。「竹河」（五）でも薫を「その頃十四五ばかりにて、いときびはに幼かるべき程よりは、心掟おとなしく、目やすく、人にまさりたる生ひ先しるくものし給ふ」とある。「元服はものうがり給ひけれど、すまひはてず」と断りを入れているのは、正編の物語の後継者としたい薫には、源氏や夕霧同様に十二歳元服が相応しい、と早熟であることを期待する世人に向けた、薫も彼ら同様に秀逸性を持った人物であることを特筆する言葉と言えよう。

この薫の元服年齢言及に対して、匂宮には最終巻「夢浮橋」に至ってもなお年齢言及はない。「幻」までの年立によって、後世の物語享受者が、薫の年齢を元にそれに一年を加えて匂宮の年齢としているだけである。但し、「浮舟」に薫が匂宮に「いま一つ二つまさるけぢめ」（一九）を持つとあって、これに対する様々な疑念や解釈が提出されてきたが、大方は作者の錯誤かと読まれている。全五十四巻を紫式部作という前提に拠っているからである。

元服は必ずしも誕生月に行われる訳ではないが、「匂兵部卿」の書き様では、匂宮が元服して兵部卿と申し上げている現在と同時系列に薫の元服もあり、その時の匂宮の年令は年立通りなら十五歳、前年中なら十四歳と言うことになる。既述のように物語は語りの現在を追って語られていて、冒頭からの語りは、まず、源氏の跡を「たち継ぎ給ふべき」匂宮と薫を並べて語り、続いて匂宮の姉兄二人、それに添う夕霧の子女を述べて、序で「その次々」を次第に従って匂宮に、との世間や中宮の思惑を匂宮が「我が御心より起こらざらむことなどは、すさまじく思しぬべき御気色なめり」との姿勢でいると述べて、一方の夕霧は、「上達部の御心尽くすくさはひにもの」す六の君を「いといたうかしづききこえ給ふ」ているとする。源氏に連なる人々の現在の消息の終わり（四）で、「二品の宮の若君は」とあらためての叙述に転ずる。これも語りの「イマ」を追いかけており、⑨で段落が切れるまで薫の現状を今迄と並列時系で語っている。つまり、薫の元服、侍従任官が十四歳になった二月であるから、匂宮のそれは既に済んでいても、縁談は多くが元服する前後頃に取り沙汰されるものであり、この元服が数年前に行われたとは読めない。ただ語りとしてはひどく曖昧で、いつのことか時間を追うには不備であり、こうした時間の流れ方は正編では見られなかった。例えば「末摘花」の出来事は「若紫」の前の時間を語っているが、巻を異にするので巻内での出来事がこのように時系列で混乱することはない。匂宮の元服が、冷泉院の十一歳は言うに及ばず、源氏や夕霧の例からも遅く、源氏より三歳年長でありながら源氏の際だった成長ぶりに圧倒された形勢で、影の薄かった

朱雀院の元服と同じか、それよりも遅いことになる。『注釈』が十三歳で元服としたのは、親王の場合を鑑みた判断であろう。匂宮は、中宮腹の身分の安定した親王であり、早く成人する必要はないのだが、紫の上寵愛の幼少期の利発[注8]さからその成長を推しはかると、声望も格別であったであろうのに、十四、五歳元服という時期の遅さについての薫の場合のような釈明がなされていないのは主人公とはしない故であろう。この無釈明に言及した解釈は見あたらないが、作者に匂宮が薫の一歳年長という認識が無いからとしか考えられない。

（四）

上述の通り匂宮の元服は薫とほぼ同時期に行われたと考えられる。そこで問題としたいのは、先に挙げた薫が匂宮に「いま二つ三つまさる」（浮舟一九）とする叙述である。薫が匂宮の二、三歳年長なら、匂宮の年齢は元服時十一、二歳になり、まさに冷泉院、源氏、夕霧と同年齢で、彼らの元服年齢にぴったり当てはまることになる。ちなみに、『新全集』の巻末に付された年立は、宣長以来の新年立と同じく「浮舟」巻でも本文の「二つ三つまさる」に対応した年齢ではなく、薫二七歳匂宮二八歳とある。従来から問題の箇所と指摘されてきたこの「浮舟」巻の叙述は、不審を抱かれつつも、匂宮が「あだあだしき方の人なればわざと若く書きなせるか」（『細流抄』）を始めとして、薫の老成した印象を描くための作為である、と言いなされたり、該当箇所だけの単なる作者の思い違い、などの見解が示されてきた。しかし、作者が作品の骨格を揺るがすような誤りを犯すであろうか、それはまずない、と考えるべきであろう。これに了とする見解を示したものは冒頭に記した熊倉氏の『紫式部集』に関する論[注9]より他に管見の限り見当たらない。こうした矛盾については、例えば、清水婦久子氏[注10]はプロジェクトによる多人数の協力で作られた当物語の場合は巻々の矛盾は当然ある、と特異な見做し方をしている。大方の見解も、『源氏物語』を一条朝でのプロジェクト作成とは見てないであろうが、右に示した見解に集約できる。

「匂兵部卿」から「夢浮橋」までに年齢に言及された人物は、薫〈上記の「十四にて、二月に侍従になり給ふ」（匂兵部卿五）・「十九になり給ふ年、三位宰相にて、なほ中将離れず」（同八）・「その頃、十四五ばかりにて」（竹河五）・当該（浮舟一九）〉以外は、薫と直接間接に関わる大君・中の君を「姉君二十五、中の君二十三にぞなり給ひけり」（椎本五）、今上の女二の宮（藤壺の宮）を「十四になり給ふ年、御裳着させたてまつり給はんとて」（宿木二）、夕霧の六の君を「二十に一つ二つぞあまり給へりける」（同二四）、浮舟を「かの君の年は、二十歳（はたち）ばかりにはなり給ひぬ」（同四三）と明かしている。他には、横川僧都関連で、「八十あまりの母、五十ばかりの妹」（手習一）、僧都の「六十にあまる歳」（同四と、妹尼の昔の婿の中将の「年二十七八のほど」（同一五）である。彼らは全て続編になって登場する人物である。正編では男宮の誕生（若菜四三）に言及はあったが、明確に三宮と示してはいない。その後誕生以来初めて具体的に「三の宮三つばかりにて中にうつくしくおはする」（横笛六）と、場面の中心的役割を担って、利発で愛らしい人格を特徴付けて語られていた。言うまでもなくそこには薫の年齢併記はないが、同じ場面に「若君は……僅かに歩みなどし給ふ程なり」と、その月齢が誕生を過ぎた数え年二歳頃と分かる語りであった。続編を創るに当たって主要人物に薫を据え、構想化するとき、冒頭巻で彼の年齢を明記すれば正編からの経過年数が分かり、創作者には事足りた。そこではほゞ同世代の男宮を好色で奔放なライバルに仕立てて語り始めるが、そのとき既に作者は薫を匂宮より「いま二つ三つまさるけじめ」を持つ人物として構想していたのではないか。そう造形された薫は、関わる物事や女性に対して、幼さの残る匂宮より一際大人の誠実さが際立つ。物語の作法通り、副人物に据えた匂宮は二、三歳年下の人で

あり、敢えて年齢に言及する必要はなく新しい物語を描いていったと考えられる。薫以外に正編から登場する人物に関しても年齢記述が無いのも物語の通例である。勿論続編は書き継いだのであるが、自覚するとしないとに関わらず、新たに語り出した物語はやはり別物で、紫の上の遺志が全く反映されていない別の作者が創った故の齟齬と考えて良さそうである。

（五）

続編はこれらの明示されている年齢表記を元に読むべきである。正編との矛盾を解消するために様々な見解が示されてきたが、「匂兵部卿」を起筆した時から、薫を二、三歳年長と構想、設定して物語り始めたなら、匂宮の元服年齢は、源氏、夕霧に並ぶ。薫の匂宮より老成した姿は物語中彼方此方に見受けられるが、これらは当初からそのように構想されていた結果であろう。どの場面でも、薫は匂宮の年長者、兄貴分的対応に終始している。例えば、大君が薫と中の君の結婚を望んでいるのを知りながら、匂宮を中の君に近づけ結婚させる（総角一五）などは、自らが大君と結ばれるために仕組んだ薫の小賢しい身勝手な策謀ではあるが、それでも匂宮を親身になって擁護、援護し世話を怠らない様は、大君の思いを忖度しての中の君への配慮とはいえ、弟を思いやる兄のような心配りで、これが弟分なら難しい対応を漂わせるであろう箇所である。浮舟を奪われ怒り心頭に発しながらも、その突然の死に自身も強烈な衝撃を受けていながら、惑乱して臥す匂宮を見舞う折の心情は、宮を許し難いと思いつつも、単なる臣下の礼を越えて、自らを抑えて優しい（蜻蛉七～）。兄の後ろ姿を追うのは弟の常である。また匂宮は、薫の身についた芳香に挑むように対抗して、「わざとよろづのすぐれたる移しをしめ給ひ、朝夕のことわざに合はせ営み」（匂兵部卿七）、住まいや庭前を「香に愛づる思ひをなん、立てゝ好ましうおはしける」（同）、と語られている。当代鍾愛の親王三の宮が、幼なじみで兄弟のような関係とはいえ年下の叔父の真似をするのを潔しとするであろうか。

薫は、浮舟に匂宮が通っている事実を知り、「昔より隔てなくて、あやしきまでしるべして率て歩きたてまつりし身にしも、うしろめたく思しよるべしや」（浮舟三〇）と、憤っていた。この「しるべして率て歩」くのこそ、年長者故であろう。薫のような性格の者が身分の高い年長者をおおけなくも「しるべして率て歩」くことは難しかろう。勿論匂宮は親王という身分柄、将来に心配の無い最高貴の人であり、それ故臣下の源氏とは身軽さも格段に違い、世間、世情にも疎くなるのは致し方ないが。正編で幼い利発さに輝いていた匂宮が、成長して、こんなにも、と感じさせる稚拙さで薫の後塵を追う日々は、よく描かれた人間性とは別に、薫の「このかみ」匂宮とは納得し難い。こうした例以外にも、共に育った薫と匂宮との親密な関わりに、年齢差を逆転させて認識することで、年少の者が少し背伸びして兄貴分を真似て振る舞い、或いは肩を並べたくて競争する言動が散見すると捉える方が説得力を持つ場面が多い。中の君と薫の仲への嫉妬の表し方、浮舟への関わりや、彼女に対する異常とも言える執着は、逢瀬後の心の動揺を隠し床に臥す（浮舟一六・二二）など心身の幼さが目につくし、またその突然死には、受け入れ難い事実に動顛して病付く（浮舟七）純情さは世間知らずの幼さでもあろう。その折りの薫の見舞いに対する心理や対応なども、年齢が逆転しているからこそ、感情を抑えられず手放しで甘えることが出来るのではないか。勿論薫の匂宮を許し難い感情を抑えて見舞う態度や心情は、単なる親しい臣下の礼のみではなく、やはり兄弟のように近しい叔父甥間の「このかみ」心が窺える。

こうした展開は、続編の作者が正編と異なることを形の上で示している。熊倉氏[注11]は、紫式部が「御法」の読み違いを正すことなく世の中に送り出した次第については『紫式部集』から読み取れるという。

(2023/01/31)

〈注〉

注1：モチいふ叢書 01・2016/10

注2：同04・2019/12

注3：「源氏物語の問題宇治十帖の人間像（一）」（「国語と国文学」第36輯第4巻1959.4）

注4：以下引用本文は『源氏物語注釈』風間書房。当該は「九」2012年10月。また、（第一段）は章段番号、数字①は一文毎の番号を私に振ったもの。以下同様。

注5：「世人は匂ふ兵部卿、薫る中将と」（匂兵部卿七）、「匂ふや薫るや」（竹河三一）に拠って、以下三の宮を匂宮、二品宮の若君を薫と表記。

注6：○「紫の上は六条院で終焉を迎えた」（嘉藤久美子『東海学園言語・文学・文化』第17号東海学園大学日本文化学会平成三十年三月）

注7：「女君〈雲居雁〉こそいはけなくおはすれど、男〈夕霧〉はさこそものげなき程と見聞こゆれ」（少女一一）

注8：夕霧に抱かれて紫の上のお前を通る時の言動（横笛六）p363°
紫の上の遺言を聞く時の発言や仕草（御法三）p503°

注9：注1に同じ

注10：（『源氏物語の巻名と和歌―物語生成論―』和泉研究叢書445°2014/3）

注11：前掲注1匂宮同。

プロフィール

元東海学園女子短期大学・椙山女学園大学非常勤講師。論文に「紫の上は六条院で終焉を迎えた」（『東海学園言語・文学・文化』第17号東海学園大学日本文化学会平成三十年三月）。共著書『源氏物語注釈』七巻から十一巻（風間書房、二〇〇九年五月～二〇一八年五月）、『風葉和歌集新注』一から四（『新注和歌文学叢書20』青簡舎、二〇一六年から二〇二三年）などがある。